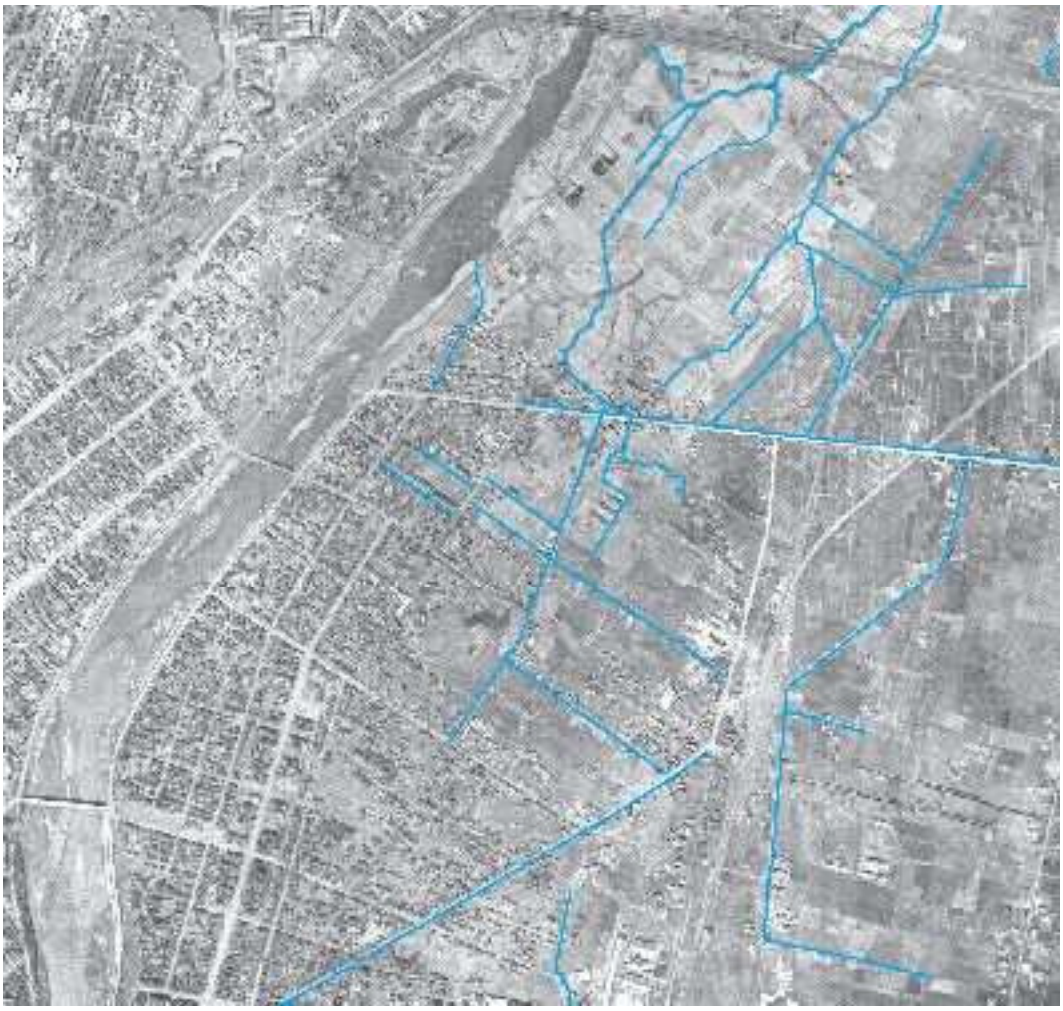
米の生産とともに延びた四村共同の用水路



昭和23年米軍撮影の航空写真に写った水路の一部

寒冷の北海道で米作りが可能に

北海道に入植したすべての人は、米を作ってご飯を作って食べたいと思っていた。しかし寒冷なため開拓使は米作を許さず、麦などを作らせた。

どうしても米を作りたい人たちが本州の出身地からモミを取り寄せて試作をし、その熱心さにうたれた開拓使もモミを配給したが、やはり冷害のためにうまくはいかなかった。

多くの人があきらめるなかで成功する人もでてきた。札幌で初めて米作に成功したのは明治6年(1873)で、明治14年（開田碑文による。白石村史では16年)には上白石村でも試作が成功し、それに希望を得た人たちが次から次へと米作を始めた。

平岸村が用水路開削

平岸村では日用水を豊平川から汲み上げて運んで使っていたが、より便利にするため、明治6年に精進川から堀を造り、澄川から天神山の西側を通り、平岸街道を現在の北海高校前を経て豊平川に注ぐ5.3キロを40日間で完成させた。

この用水が後に豊平、平岸、白石、上白石の4村の田畑へ水を注ぐ母川となった。明治20年(1887)の記録（次ページ左上）を見ると、かなり米作が広まっているのが分かる。

4村あげて用水路開削へ

明治21年(1888)には本格的な稲作を進めるために、豊平、平岸、白石、上白石の有志による五ヵ村有志農談会を組織し、共同用水路の開削について協議を始めた。

明治25年には平岸、豊平、白石、上白石の4村の代表者が集まり、水利組合発起人会を設立し、翌26年5月29日に用水開墾請願書を北海道長官に提出した。

工事補助金として見積額の2分の1を申請したが、翌月に却下された。

翌27年1月、4村の代表者は再協議

村　名	作付面積	収　穫
平　岸	7　反	な　し
豊　平	7　反	1,080 ㌔
上白石	6.5反	1,170 ㌔
白　石	73　町歩	157,680㌔
月　寒	73.5町歩	131,580 ㌔

（明治20年調べ）

して豊平外三ヵ村聯合用水組合を設立し、２月20日に再び用水開墾請願書を提出した。

９月15日に工事認可が下りた。工事費1,660円のうち補助金が490円で、12月までに工事を終わらせることが条件だった。わずか３カ月の工期である。

幹線用水路は明治６年にできていた平岸用水堀を改修して使い、その途中から１～４号用水路を開削して４村に水を引くのだが、幹線と1号～4号合わせて23 ㌔に及ぶものだった。

この工事は11月１日に工事入札し12月18日に完成にこぎつけた。実際の費用は910円で、補助金490円、4村88人の寄付404円、不足金16円だった。

自主管理で民主的に運営

明治28年(1895)に水門修理や用水路掃除を取り決めた聯合用水路組合規程を改正し、各用水路は各村が自主管理するほか、用水量の増加､減水時などの対応は全組合員が協議のうえ合同作業を行うことなどを決めた。

明治35年に二級町村制が敷かれ、豊平役場と白石役場が成立した。両役場直轄の用水組合が用水を管理することになり、明治39年(1906)に用水路事業は強制的に役場へ移管させた。しかし60～70円だった負担金が400円になったうえに、洪水で橋や水門が破損してもすぐに修理されなかったために、組合員からの申し出により明治43年に再び組合の管理にもどった。この年に豊平村と上白石村の一部が札幌区に編入され、大正に入ってから豊平外四ヵ村の組合となった。

昭和23年米軍撮影の航空写真に写った１号用水路と２号用水路

四ヵ村聯合用水路

（明治45年重延実所蔵・用水路設計平面図から）

地域	用水路	延　長
明治27年12月竣工		
平岸村	幹線	3,248間（5,904 m）
豊平村	1号	2,320（4,217）
〃	2号	2,352（4,275）
〃	3号	3,376（6,137）
〃	4号	1,344（2,423）
以下明治45年までに竣工		
豊平村	5号	632（1,148 m）
〃	6号	244（443）
白石村	7号	1,050（1,908）
〃	8号	393（714）
〃	9号	210（381）
〃	10号	375（681）
〃	11号	67（121）
〃	12号	297（539）
〃	13号	134（243）
〃	14号	520（945）
〃	15号	492（893）
合計		17,045（30,993 m）

用水の需要は年ごとに高まり、豊平村に5、6号用水路、上白石村と白石村に7～15号用水路が明治45年までに造られ、総延長は31 ㌔に及んだ。

大正に入った頃から、毎年9月1日を４村の全組合員による溝（どぶ）さらいの日と決め、終了後は４村組合員の慰労会を行った。総会時には記念式典、品評会、褒賞授与などを行い、４村の貴重な交流、親睦の場となった。組合は物価が高いときには出面賃の協定も行い、田植え、草取り、代かきの賃金を低く抑え、送り迎えを廃止するなどの調整の役目も果たした。

戦後のピーク以降都市化で解散へ

昭和22年(1947)に農地解放が行われ､自作農が増え、戦後の米需要にも支えられて用水需要も高まったが、その後は都市化の影響で水田耕作者が減り続け、ついに昭和36年(1961)に聯合用水組合は解散した。

明治６年以来の平岸幹線は87年の使命を終えて埋め立てられて暗渠となり、拡幅された平岸街道は２車線の幹線道路となった。前後して１～15号用水路もすべて暗渠または埋め立てられた。

（富岡秀義）

１号用水路。豊園小学校から白石側を見る（昭和33年）

アメリカの技術を取り入れ、日本の近代酪農を開花させた

上白石にあった宇都宮牧場の模範牛舎とサイロ（大正３年撮影）

酪農の勉強のためアメリカへ

慶応２年(1866)に大分県下毛郡大幡村（今の中津市）で生まれた宇都宮仙太郎は東京の私立東京神田共立学校（校長・高橋是清）に入学し、明治18年(1885)に19歳で北海道に渡り、札幌県立真駒内牧場（後の真駒内種畜場）の実習生となった。場長は後の北海道知事町村金吾の父、町村金彌だった。

英文が読める仙太郎はアメリカの原書で研究したが、分からないことも多く、本格的な勉強をするために明治20年に渡米し、ウイスコンシン州立農事試験場や州立短期大学で学んだ。

本場の酪農技術を身につけて明治23年に帰国すると、町村金彌は雨竜蜂須賀農場の支配人になっており、彼に招かれて牛担当係長となった。この農場は侯爵である菊亭・三条・蜂須賀三家の共同経営で始まったが、間もなく三条侯の死で閉鎖された。

翌24年、仙太郎は町村金彌から牛２頭と金200円を借り、札幌の北1条西15丁目の現在の道立近代美術館付近で牧場の経営を始めた。市乳の販売と、民間人としては初のバター製造を行い、豊平館に納入した。

組合を結成し飼料を共同仕入れ

明治25年(1892)、仙太郎は10数人の乳牛業者とともに札幌牛乳搾乳業組合を設立した。別名ビール粕組合と呼ばれたが、それは廃棄処分されていたサッポロビール会社のビール粕を一手に買い取り、飼料として組合員に配付したからだ。また麦ぬか（フスマ）などの飼料を卸元から一括購入して組合員に配付する共同購入も行い、育牛・市乳販売などの協議も行った。

その後、牛痘製造のため牛を飼育している医師に招かれて上京し、2年ほど東京にいたが、バター製造に将来性を見出して帰札し、牧場経営と同時に量り売りの市乳販売を始めた。

明治35年(1902)、白石村上白石（今の菊水１～３条３～５丁目付近）の20㌶の未開地にサイロなどをもつアメリカ式の牛舎を建て、有畜農業、酪農業の草分けとなった。当初は20頭、最も多いときは８３ 頭の牛を飼育した。

アメリカのウイスコンシン大学附属農場

開設当初の宇都宮牧場の位置

宇都宮仙太郎

関東大震災がきっかけで雪印バター誕生

明治39年12月に再び渡米し、冬期間の短期大学に入って学び、帰国のときには民間人として初めて優良種牛50余頭を輸入し、品種改良を進めた。北海道の酪農が全国的に有名になったのは、仙太郎が先進的な酪農を実践し、品種改良を行って酪農界を牽引してきたからで、白石は北海道の先進酪農の発信地となったのである。

雨竜牧場の仲間と宇都宮仙太郎（矢印）

明治40年(1907)、札幌酪農組合を設立し、仙太郎は組合長となり、デンマーク農業の導入に務めた。

明治43年に牧場に近接する豊平に金星ミルク札幌練乳場(現豊平1条3丁目)を設立した。また、大正3年には北海道大学の宮脇教授の指導を得て、協力者とともに北海道練乳株式会社を設立した。当時、練乳(コンデンスミルク)はほとんどが育児用に使われていた。

大正12年(1923)に関東大震災が発生した。状況が世界に伝わると、練乳が救援物資として多量に贈られ、さらに物価上昇を抑えるために輸入関税が廃止されて乳製品がどんどん輸入されてきた。練乳会社が牛乳の仕入れを控えたために生産者はすっかり困り、大正14年(1925)にデンマーク式の共同組合活動を参考に北海道製酪販売組合（翌年名称を変更し北海道製酪組合聯合会＝略称・酪聯・後年の雪印乳業）を結成し、バターの自主生産を始めた。製造には後の雪印乳業の社長となる佐藤貢があたった。雪印バターの第1号であり、やがて国内シェアの60パーセントを占め、海外にも輸出されるようになった。

牧場を上野幌に移転

大正7年、宇都宮牧場内に定山渓鉄道が敷設され、牧場が分断された。牧場の一部を売り、その資金で大正13年に今の厚別区上野幌に35ヘクタールの土地を買った。その隣接地に、宇納牧場（宇都宮・出納）を開設し、3年のデンマーク派遣を終えて帰国した娘婿の出納陽一にデンマーク酪農を始めさせた。

乳牛60頭、耕馬4頭、豚50頭、ニワトリ50羽を飼育し、道庁からデンマーク式農法実験指導農場の指定を受け、酪農青年の指導にあたった。デンマーク農業に関心をもつ実習希望者が全国から殺到した。この年から本格的なチーズ、バター製造販売を始めた。

大正14年、仙太郎の長男の勤はアメリカに渡り、酪農を学んで昭和2年に帰国。上野幌の新しい牧場の経営に参加し、ホルスタインの改良に情熱を傾けた。

昭和2年(1927)、長男の勤は牧場を上白石から上野幌に移転した。35ヘクタールの土地のうち23ヘクタールは耕地とし、主として種牛の生産とバター・チーズの製造を行った。

仙太郎は昭和9年に高血圧で倒れ、昭和13年に上野幌に移って不自由な体で療養を続けたが、昭和15年(1940)3月1日、75歳で亡くなった。

（富岡秀義）

現在の白石警察署付近。北海道で初めて耕作されたアルファルファと宇都宮仙太郎

独立歩兵大隊に水道を引き、その管理のために造った道

給水塔が残る西岡水源池。今は市民の憩いの場になっている

水源池から北へ延びる道

明治29年(1896)、月寒に独立歩兵大隊（32年、歩兵第二十五連隊に改編）が新設され、平時2,000　人、戦時6,000人分の水の確保が必要になった。

そこで鹿の踏み分け道を利用して水道管を引き、維持管理用として明治42年(1909)にその上に道路をつくった。これが水源池通の前身で、大正5年(1916)には室蘭街道（今の国道36号）まで延長されてきていた。

また、明治 6年(1873) 5月にはすでに江別道路（今の国道12号）から北側には、今の函館本線を越えてけもの道が延びていた。

その途中の部分はかなり後まで畑地のままで、栄通8丁目付近が昭和36年(1961)、札幌白石郵便局付近が42年(1967)に幅15㍍以上の道路になっている。

今日のように拡幅され舗装化されたのは、札幌オリンピックの前年の46年(1971)で、この時に白石区の部分も「水源池通」と命名された。なお陸橋が完成したのは昭和51年(1976)で、厚別通との合流点まで延長されたのは54年である。

水源池通の拡幅により、6丁目から8丁目までほぼつながっていた本郷商店街が大きく分断されるという代償も払った。

水量の少ない場所で村民分に匹敵する兵の飲料水確保

工事報告書には「兵営における飲料水は井水を使用してきたが、年々水量の不足を感じ、かつ井水の水位も低下してきて、ますます給水が心配な事態になってきた」と書かれている。

月寒は台地で、普通でさえも水量が豊富でないところに軍隊が設置されるのだから、水の確保は重大問題だった。

連隊ができる前の明治32年の月寒の人口は 2,899人だったので、新たに住民が生活するためには同等以上の水を確保することが必要となった。

必要水量からダムの位置を決定

西岡水源池は明治42年(1909)、月寒歩兵第二十五連隊が軍用として完成させたもので、豊平峡ダムが完成した昭和47年(1972)まで水道の水源として使われていた。

当時の東京における1人1日の水の需要量 1.1立方㍍に余裕をもたせて必要な水量を計算し、えん堤を現在の西岡水源池の位置に決めた。工事は明治41年(1908) 9月から始まり、1年 2カ月、176,903円の費用で完成した。

水源池通を歩く

鹿の踏み跡から始まった曲がりくねった道は、馬車の交差もままならず、

その状態が大正末期まで続いたという。現在では想像もつかないりっぱな道が西岡水源池の北側から月寒川に沿って北東に延び、かつての広大な旧第二十五連隊のあった場所に達している。水源池通が国道36号を越えたところは連隊の敷地の一部で、月寒体育館と北海道開発局建設機械工作所が広い敷地に建っている。

豊平区と白石区の境界となる東北通・栄通も、戦後白石地区に多く出現した街道型の商店街である。国鉄千歳線跡地のサイクリングロードは昭和49年(1974)に完成した。

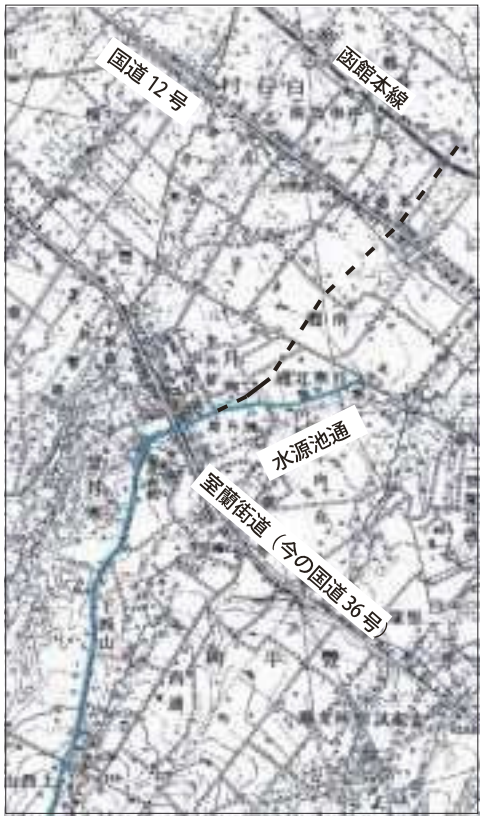
さて水源池通を進むと、左手に昭和38年(1963)設置の白石消防署の望楼がそびえ、その100m西に昭和48年(1973)開設のＮＴＴ札幌白石センタの巨大なパラボラアンテナが見え、やがて国道12号にぶつかる。

これから平和通までの間は、明治30年ころまで鈴木レンガ工場の土取場が左手にあり、その跡地は昭和40年ころまで養鯉池になっていた。

昭和54年(1979)開局の札幌白石郵便局を左に、平和通を越え柏丘中学校を右に見て函館本線の陸橋を渡ると、北郷一の繁華街、北13条北郷通に出る。以前はこの通りまでが白石駅付近を中心とした高台で、農業適地でもあった。

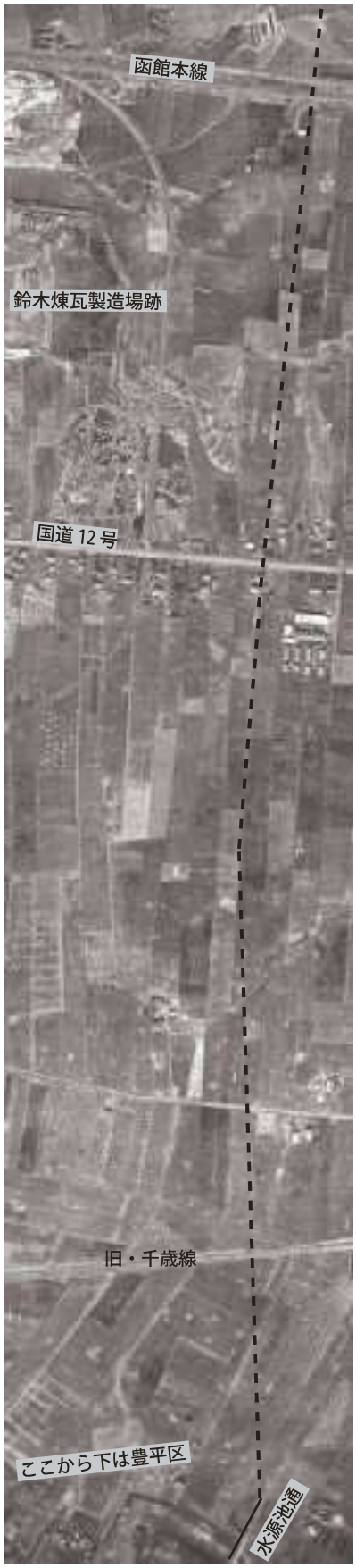
その北の厚別通に合流する地点で水源池通は終わっている。一帯は湿地で水田地帯にもなったが、昭和５０年(1975)に札幌新道が新設され、付近の宅地化が急速に進み、昔の面影の低湿地はすっかりなくなった。

（塩見一釜）



大正５年の５万分の１地形図（部分拡大）
下の地形図では点線のように道筋が変わっている

昭和40年の５万分の１地形図（部分拡大）
時代が進むにつれて水源池通が延びているのがわかる



昭和23年頃米軍撮影の航空写真に現在の水源池通の位置を示したが、道は豊平までしかない

深くぬかるむ泥炭湿地を暗渠排水でみごとな美田に変えた

川下の中沢宅の塀の内側に標示板が設置されている

泥炭低湿地での苦労

川下地区は、明治17年(1884)に入植したのが最初で、入植者の大部分は長野県人なので「信州開墾地」と呼ばれた。

明治23年(1890)には19戸になっていたが、泥炭の低湿地のため、厚別川沿いの自然堤防が唯一の道路だった。明治38年(1905)には北郷へ通じる道路(今の北郷中央線・白石北簡易郵便局前から北郷橋の通り)が、また大正3年(1914)には雁来へ抜ける道路(当時蛇行していた厚別川筋)ができ、昭和7年(1932)の町村制施行後は白石村大字白石字厚別川下となった。

この地域は高位泥炭地のため、秋になっても水は抜けず、稲刈りは膝までぬかりながらひと足ひと足運んでの作業だった。後で暗渠排水を生み出す中澤八太郎は板の中ほどに2つの穴を開け、縄を通して足にしっかり結び付け、いわゆる「下駄」をつけて、せっせと稲刈りをしていた。

明治26年長野県から入植

中澤八太郎は安政元年(1854)9月、長野県有賀村で農業を営む中澤彦次郎の長男として生まれたが、明治24年(1891・37歳)から26年にわたる諏訪湖の氾濫、その上の養蚕の生育不良で農家の人たちは疲れ果てた。ついに26年4月7日、故郷の人たちと北海道へ渡り、5月に知人を頼って厚別に入植した。半墾地1㌶を22円で買い、両親と3人で将来を夢見て開拓に励んだが、間もなく母ソデを病気で失った。

明治33年(1900)には川下に1.3㌶の土地を600円の借金で買い、いつしか数人の小作を擁するほどになり、この地方有数の農家に成長した。

暗渠排水で収量が増加

八太郎は付近の地勢と厚別川の水利の便をみて、この地が必ず水田地帯となると確信し、明治26年(1893)に率先して試作田を造成した。しかし前述のような身を没する田の状態なので、排水施設の必要を痛感した。故郷の桑畑で使われていた通称「水道」という暗渠排水を思い立ち、有賀村から用具として平鍬(くわ)、鋤簾(じょれん)(柄の先に箕(み)を取り付け、土砂や小石をかき寄せる道具)などを取り寄せ、明治28年(1895)から2年をかけて約1㌶の水田に暗渠排水を行った。

水田の中に20㍍間隔に幅40㌢、深さ1㍍の4筋の深い溝を通し、その底にさらに細く深い幅15㌢、深さ30㌢の溝を

標示板の場所

掘り、その上にナラやトドマツの割り板で蓋をし、その上に枯れたアシ、カヤ、雑草などをかぶせ、土をかけてもとどおりにした。

その最下流部に水穴（落ち口）を設けた。そのおかげで水田操作がしやすくなり、米の質も向上し、泥炭地特有の赤サビ色も少しずつ消えていった。10㌃あたり収量も60㌔グラムから90㌔グラムになった。

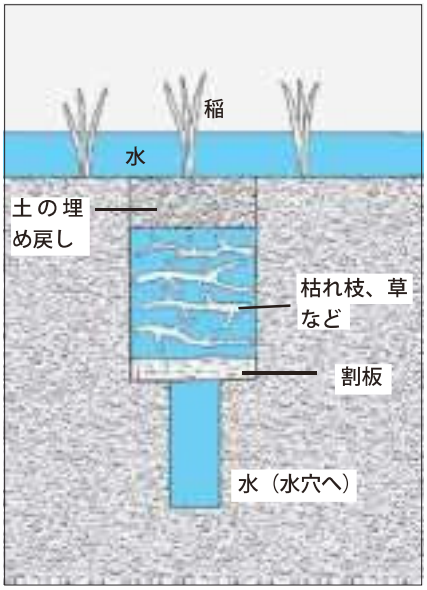
暗渠は全道に普及

やがてこの「水抜き」といわれる暗渠排水が全道に普及した。その功績が認められて昭和16年（1941）6月、北海道土工組合連合会から「暗渠排水発祥の地」と認定され、昭和19年5月、記念仮標が八太郎所有の水田に建てられた。なお今日、記念碑は中澤敏弘邸内に氏の費用で建てられている。

この間、八太郎は米の改良にも努め、明治39年には大野村から取り寄せて優良稲を選別して良質の新品種を開発した。うるち米では「中澤白毛」、もち米では味も収量でも優秀な「厚別もち」が有名になった。

（塩見一釜）

暗渠排水の作業風景



暗渠排水の構造

中澤八太郎の暗渠排水のおかげで厚別川流域は見渡す限りの水田になった（昭和23年頃米軍撮影の航空写真）

バイオの先駆者、半澤洵は白石村出身の納豆博士

明治45年5月、ドイツハノーバー高等工業学校実験室で

仙台藩開拓民の子として誕生

半澤洵は、明治12年(1879)1月9日、白石村31番地に、半澤時中と加代の長男として誕生した。

半澤時中は、仙台藩片倉小十郎の家来として、父の時雍(当時66歳)と共に北海道開拓使貫属となり、明治4年に白石村に入植した。奥羽盛衰見聞誌下編の図面には、右14番地に半澤時雍の名が見える。

父の時中は29歳のとき開拓使工業局営繕課に務め、その後開拓使属官になったため、明治15年12月に南2条東4丁目の官舎に転居した。

洵は明治17年3月に札幌県創成小学校に入学した。そこで白石村生まれの先輩である高橋進、手塚直巳らとの出会いもあった。

明治25年(1892)8月26日、高等科4年を卒業。すぐに札幌農学校の予科を受験して合格した。農学校で予科5年、本科4年の課程を終えて、明治34年7月に卒業したが、学校では農業生物学科植物病理学を専攻していた。

農学校の恩師、宮部金吾の計らいで北海道農事試験場の農芸科主任になり、応用菌の研究を始めた。幸運にも東京で北里柴三郎のもとで勉強する機会も与えられた。

北大で応用菌学の研究を深める

明治40年(1907)9月、札幌農学校が東北帝国大学農科大学(北大の前身)になったとき助教授に任官した。

明治44年9月には、応用菌研究のためドイツをはじめ欧米13カ国に留学して、農業経営と病原菌の結びつきを学び深めてきた。

大正5年(1916)6月に教授となり、「土壌と肥料の微生物に関する研究」「農業経営と土壌の肥沃度」「札幌村に発生せし玉葱の腐敗」「牛乳の殺菌」などの研究論文を次々と発表した。なかでも半澤洵を有名にしたのは、近代的納豆製造法の確立だった。

※この標示板は白石区老人クラブ連合会が製作・設置したものである。

標示板※の位置：中央１条４丁目３番

現在の地図に片倉家所蔵の手書き地図（明治 25 年作成）を重ねたもの

ナットウ菌の純粋培養に成功

仙台藩白石出身を親にもつ洵には、自らの食生活と関連した課題を大切にした。納豆は東北の代表的な食べ物だが、ワラに含まれるナットウ菌を使い、勘と経験で作られてきた納豆製造法は不安定で衛生面でも問題があるものだった。

この問題に着目した洵は、ナットウ菌の抽出培養に成功し、温度と湿度のバランスによる安定したナットウ菌の純粋培養法を考案したのである。

この科学的で衛生的な半澤式改良納豆製造法を広めるため、業者一人ひとりに丁寧に指導し、北大を定年退職するまで 26 年間にわたって指導を続けた。わが国の納豆製造法は現在この方法で行われているという。

半澤　洵

以来、納豆博士と呼ばれ、納豆研究だけが注目されたが、洵の工業微生物の研究は外国では著名であった。

バイオテクノロジーは現代の寵児となっているが、その根幹は発酵技術であり、日本がその最先端をいっているのも洵の功績から出発していると言っても過言ではない。

大学教授時代の博士は、農地に作物病が発生したと聞くと、ただちに現地へ行って解決に努めた。研究室よりも現場を大切にした研究者だった。

有島武郎とともに遠友夜学校教授に

明治27年に新渡戸稲造博士が私財で創設した札幌遠友夜学校では、宮部金吾、有島武郎、野中時雄らとともに無償の教授となって学生を指導した。大正 10 年には第 3 代校長に就任した。

遠友夜学校は、戦時中の昭和 19 年 4 月、道庁の命令で軍の施設に転用されたために閉校し、洵は最後の校長となってしまった。

社会事業に力を注ぐようになったのは新渡戸稲造の感化といわれる。新渡戸、有島らはキリスト教の信者として奉仕活動を実践したが、洵は入信せず、自分の考えで奉仕活動を続けた。

大正13年から北大に学ぶ学生のなかに宮城県出身者が多くいた。後輩のために老朽化した仙台寮を改築すべきと、幾度も仙台市に足を運んで資金調達に心をくだき、昭和40年にやっと近代的耐火建築の寮を建てた。洵の誠実で意志の強い姿と、宮城県出身者に感謝されているという。

退職後は福祉事業に貢献

昭和 16 年、北海道大学を定年退職後、各種の社会事業、福祉団体で奉仕活動をしていた。

その役職は、北海道社会事業連盟理事長、北海道総合開発調査委員会文化厚生専門委員会委員、各種大学の教授、校長など 20 を超えるが、役職を形式的に勤める人ではなかった。共同募金運動では使用済みの収入印紙は額面の2～5㌫を戻してくれるというので、東奔西走して膨大な量の書類を借りて歩き、自らていねいにはがして10万円あまりを得たという話もある。

趣味に宝生流謡曲、能書家などがあり、白石の藩士出身を自認していたとも伝えられている。昭和47年に没した。

（中濱康光）

半澤洵の生家は明治4年入植時の右14番で、写真のペイント会社の位置だが、標示板※は 13 番の武田さんの敷地にある

有島武郎は札幌をこよなく愛し、白石では林檎園（りんごえん）の中の家に住んだ

菊水にあった家。現在は小野幌の開拓の村に移築して保存されている

農業にあこがれ札幌へ

有島武郎は明治11年(1878)に東京で生まれた。父の望みで学習院中等科に進学し、皇太子の学友にも選ばれるほどの恵まれた家庭だったが、武郎は上流階級や実業界を嫌い、農業にあこがれた。

札幌農学校行きを決意したのは生き方が異なる父から離れて自由に生きたかった面もあったといわれる。

明治29年(1896・18歳)、札幌農学校予科に編入学し、母方の伯父である札幌の新渡戸稲造教授宅に寄宿した。遠友夜学校の無給の講師として熱心に参加し、貧しく恵まれない人たちとの触れ合いで社会問題にめざめた。

アメリカ留学後再び札幌へ

明治34年(1901・23歳)農学校卒業のとき、日記に「我が真生命の生まれし故郷は札幌なりき」と、農学校の５年間が生き方に決定的な影響を与えたことを記したが、それほど、武郎青年には札幌の生活は大きな影響を与えた。

親友の森本とアメリカ留学の後、東北帝国大学農科大学(旧札幌農学校)から講師に招かれた。これには父の働きかけがあったようだが、武郎にも望むところだった。英語、倫理、社会問題、文学史などを担当し、清新な講話は学生たちの人気を集め、名物教授となった。

結婚し白石のリンゴ園に住む

明治42年(1909・31歳)３月、親の勧めで陸軍少将の娘の神尾安子と結婚し、永山氏別邸そばの貸家と苗穂近くの貸家に短期間住み、上白石村２番地（今の菊水１条１丁目）に移った。43年には武者小路実篤、岩内の漁夫画家木田金次郎が来遊し、木田をモデルにした「生まれ出づる悩み」に当時住んでいた家に来訪したことを書いている。

「私が君に始めて会ったのは、私がまだ札幌に住んでゐる頃だつた。私の借りた家は札幌の町端れを流れる豊平川といふ川の右岸にあつた。その家は堤の下の１町歩程もある大きな林檎園の中に建てゝあつた。」

この家は、新婚生活を営み、子供が生まれ、思想的な問題から警察に監視され、本格的に文学への道に傾斜していくことになったなど、有島にとって最も濃密な生活を送った場所だった。豊平川を題材とした「幻想」や「或る女のグリンプス」を発表し、本格的に文学の道に進んでいった。

妻安子の病気でやむなく東京へ

札幌永住を決意し、大正2年に自ら設計した北12条西３丁目の新居（現在は

標示板の位置：菊水１条１丁目　豊平川河岸公園内

菊水１条１丁目の住居跡。木は建物を撤去する前のまま立っている

南区の芸術の森に保存）に引っ越した。自ら設計し、生涯住むことを決意した家だったようだ。しかし、大正３年（1914・36歳）9月、死の病とされていた肺結核で安子が倒れ、市立札幌病院に入院の後、一家をあげて帰京した。予期せぬ札幌生活の終止符だった。

大正５年に安子（28歳）を失い、同じ年に父（75歳）も失った。

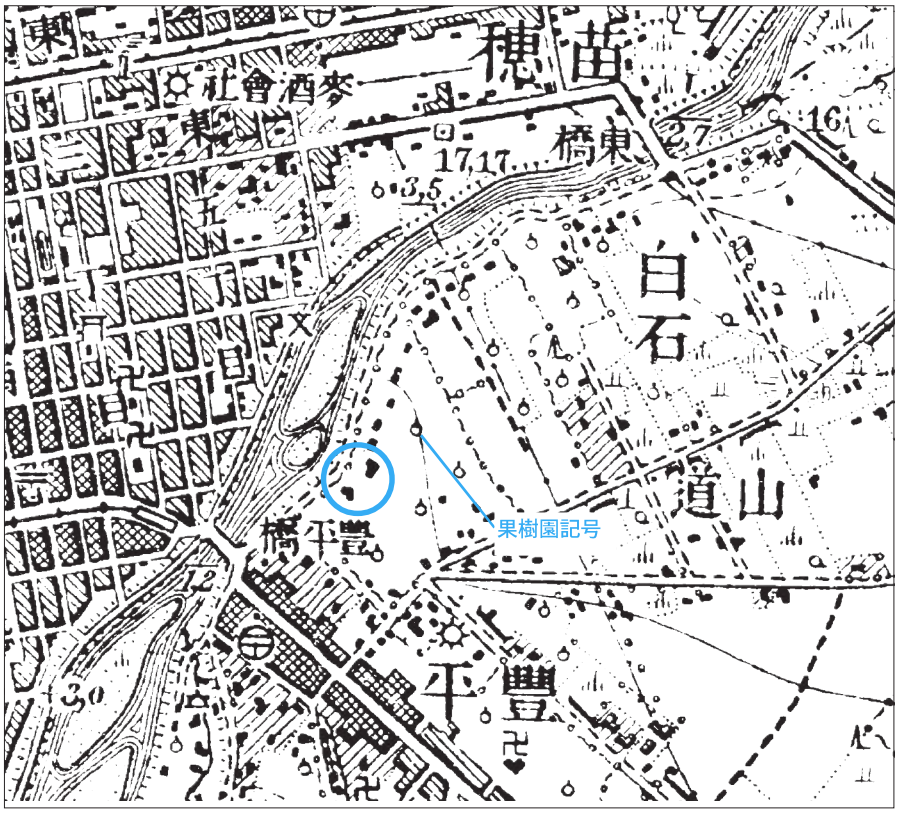
以後、有島は文学に打ち込み、「惜しみなく愛は奪ふ」「カインの末裔」「生れ出づる悩み」などの名作を次々に発表した。

有島武郎

農地解放と死

大正11年（1922）、父が武郎の将来のために買った狩太（今のニセコ町）の農場を小作人に無償で解放した。武郎は若いころから小作人からの収奪を嫌っており、父の死を機会にやめることができたのだ。

（中西哲男）

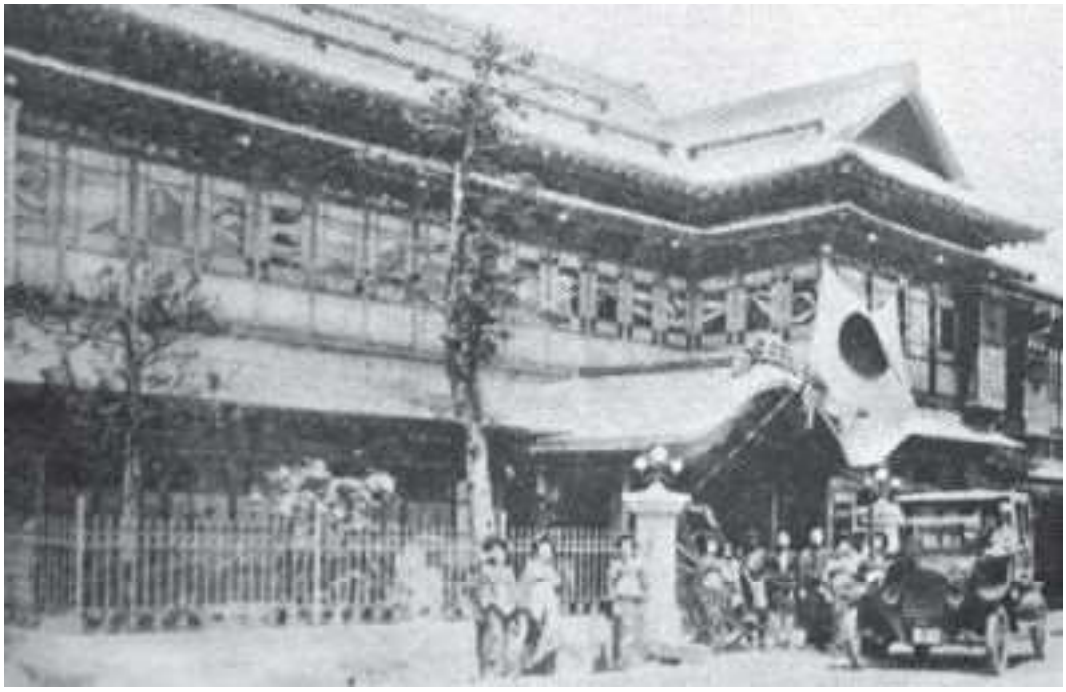


大正５年の５万分の１地形図（部分拡大）。有島武郎が住んだ家はこの辺にあった

札幌遊郭（通称白石遊郭）跡

標示板の位置：菊水５条２丁目　菊水公園内

経営危機のリンゴ園主らが土地を提供し遊郭を白石に誘致



大正 12 年の遊郭風景。建物は太田楼

薄野遊郭の誕生

明治4年(1871)、開拓使は札幌本府の建設のため、本州各地から請負人、大工、職工、人夫など1万人もの人が札幌に集まった。同時に、それを目当てに料飲店や売女屋が増加し、開拓使はその対応に追われた。そこで岩村通俊開拓使判官は、政府に売女屋設置を求め、認められている。

大通から北を官庁街と官舎街、南を一般住民の居住地、さらに南を接客地帯と決め、開拓使直営の妓楼である東京楼を設立した。その後相次いで民営妓楼や料飲店が開業し、妓楼30軒、遊女は300 人にもなった。

国際駆け引きで芸娼妓を解放

明治５年６月、横浜港に寄港したペルー帆船マリア・ルイズ号から清国(今の中華人民共和国) 籍の苦力(人夫) が海に飛び込み、虐待を受けていることを日本政府に訴え、裁判の結果解放された。この処分に不服なペルー側は、日本の芸娼妓は年季奉公に名を借りた人身売買だと非難した。その年 10 月、江藤新平司法郷（今の法務大臣）はやむを得ず芸娼妓解放令を発布した。

開拓使は北海道の特殊事情を説明して実施の延期を求めたが却下された。しかし、取り締まりをしても効果があがらないうえ、解放された遊女たちも生活苦で自殺するものや妾になるものが続出したため、政府は明治6年に再び許可をした。

開拓使はそれを受けて明治10年に貸座敷並芸娼妓三業規則を定め、薄野に正式に札幌遊郭を発足させた。三業とは貸座敷業、芸妓業、娼妓業である。

経営者は東北出身者が多く、娼妓に東北の貧しい農漁村出身者が多いのは地元から連れてきたからだった。

開道 50 年記念博覧会を機会に遊郭を白石に移転

明治初期は郊外に位置していた薄野遊郭は、明治後期には都心の一部になっており、移転を求める声が大きくなってきた。 これに呼応して札幌区に編入を希望する山鼻、豊平、苗穂が候補地の名乗りを挙げた。

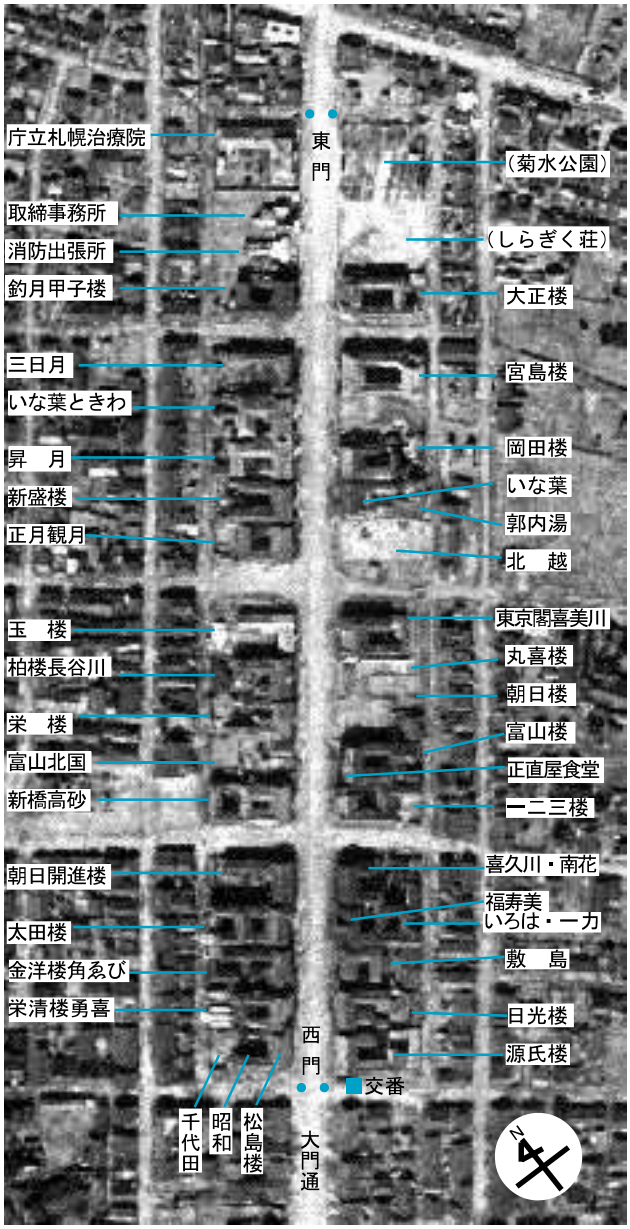
当時の白石村一帯のリンゴ園は病害虫の発生で壊滅状態が続き、先が見通せない状態だった ため、遊郭誘致はまたとないチャンスだった。 リンゴ園主らは誘致の前提条件となる札幌区への編入を町民に働きかけた。その成果があがり、明治43年に山鼻、豊平、苗穂とともに旧上白石村の一部が分割されて札幌区に編入された。

窪田恭太郎ら 10 人のリンゴ園主は 68,000平方㍍の土地を区に寄付し、大正６年に遊郭の移転が決定した。 実際

北海道庁立白石治療院・札幌市助産所跡

標示板の位置：菊水５条１丁目　菊寿園

助産所時代に長生園が助産所の一部を使って開設した頃の玄関



に遊郭の移転が始まったのは開道50年記念の北海道大博覧会が開かれた大正7年から大正9年にかけてで、33軒中31軒（札幌市史では27軒）が移転を完了した。名称は従来と同じ札幌遊郭だったが、一般には白石遊郭と呼ばれた。遊郭ができると白石の地価は急騰し、農園から市街地への変身で見事に危機を乗り切った。

白石遊郭は、今の菊水2～5条の1丁目と2丁目の間の道路を挟んでだ両側に妓楼が並び、通りの中央には小川が流れていた。遊郭の東西の入り口には幅90㌢、高さ3㍍の石門が立ち、「札幌遊郭」の文字が刻まれ、大きな門であることから大門と呼ばれていた。また、国道36号からこの大門に至る通りは大門通と呼ばれた。

妓楼は東西10間（18㍍）、南北15間（27㍍）の敷地にカギ型に建てられた。通りに面した正面玄関屋根の破風（ぱふ）（装飾板）には動物が彫刻され、1階に楼主居室、食堂、女中部屋、洗濯室、2階に娼妓個室などが設けられていた。

妓楼は31軒あり、娼妓は妓楼ごとに10～20人いた。彼女たちは周旋屋を通して大正期で800円から2,000円の間で売買された。

取締事務所

西門に交番があり、楼主の許可を得て外出する娼妓は、出入り時に許可証を交番に提出することになっていたという。東門には薄野から移転してきた北海道庁立白石治療院があり、警察署長が病院長となって毎週1回の性病検査を行い、必要に応じて入院治療を行った。

戦争拡大から妓楼廃止まで

終戦を迎えた昭和21年1月、占領軍による娼妓取締規則廃止で、遊郭が廃止されるかと思われたが、占領軍の進出で旧内務省は急きょ公設慰安所の開設を全都道府県に指示し、実質的に全国に遊郭が復活した。

一方、昭和23年に性病予防法と保健所法ができて、性病予防と治療の推進は保健所の担当業務となった。それに伴い、市は道が保有する白石治療院と市が薄野に保有する性病予防施設と交換して業務にあたることになった。

昭和23年施行の児童福祉法に基づいて札幌市助産所ができることになり、当初は白石治療院跡に建てることを計画したが、まだ性病予防施設として使っていたために大通西19丁目に設置した。昭和26年（1951）に札幌市が風俗取締条例を制定し、アメリカ軍の撤退も始まった。そのため廃業する妓楼が相次ぎ、昭和33年（1958）の売春防止法完全施行で白石遊郭は姿を消した。

昭和27年に白石治療院が閉鎖され、札幌市助産所が全面改築して移転した。医師、助産婦などを配置して、昭和44年（1969）4月に法律が廃止されるまでの約20年間、妊婦・育児相談・入院出産などで数多くの母子の健康を守った。

昭和34年に助産所の一部を使って養護老人ホーム長生園が開設され、翌35年に現在地の大通西19丁目に移転した。現在、その跡には軽費老人ホーム菊寿園が建っている。

（富岡秀義）

大谷地駅跡（おおやちえきあと）

標示板の位置：栄通19丁目8 白石東冒険公園内

旧国鉄千歳線は切り替えで廃線。線路跡はサイクリングロードに

開業当時の大谷地駅

私鉄が札幌・室蘭を結ぶ

大正6年(1917) 9月、室蘭町の楢崎平太郎らが発起人となって室蘭本線の早来（はやきた）停車場を起点とし、釧路本線（今の根室本線）の金山（かなやま）停車場を終点とする金山鉄道会社の設立を鉄道院に申請した。

許可を受けて翌年創立総会を開き、社名を北海道鉱業鉄道会社と改称し、本社を東京に置いた。

早来を起点とする最初の計画は、地形上の理由から沼ノ端に変更して着工した。大正11年7月に沼ノ端・上鵡川（むかわ）・生瞥（いくべつ）間、翌年6月に生瞥・似湾（にわん）間、11月に似湾・辺富内（現富内）間が開通した。この間、沼ノ端・苗穂間(128.6キロメートルの許可申請を行い、11年に免許され、建設工事は沼ノ端・月寒間で着手したが、 財政困難のため何度も延期され、11年11月には小樽の犬上慶五郎が社長となり、本社を札幌郡白石村に移した。

大正13年3月、社名を北海道鉄道会社と改称、15年8月に苗穂・沼ノ端・上鵡川・辺富内間の延長128.6キロメートルの営業を開始し、8100型蒸気機関車が引く客車・貨車混合編成列車は札幌・沼ノ端を2時間20分で結んだ。沼ノ端の先はすでに開通している室蘭本線が敷設されていた。札幌・室蘭間を従来の岩見沢経由の路線と比較すると、距離で32キロ、時間で1時間40分の短縮となった。乗車運賃は岩見沢経由よりも6銭高の1円56銭だったが、沿線住民には札幌と直接行き来できる喜びの方が大きかった。

また、沿線各地に及ぼした経済効果は計り知れず、貨物輸送が活発になった。

鉄道用地の買収で畑を分断された農家は、「山田踏切」など各自の名を付けた私設踏切を設けた。これは鉄道の敷設にあたって鉄道会社が認めた条件だった。

列車は規則正しく1日5往復し、農作業する人たちの、昼食や農作業終了の時を知る時計代わりになっていた。

大正15年の後半から王子製紙社長藤原銀次郎によって株の買い占めが行われ、昭和4年(1929)7月、王子製紙の取締役足立正が社長に就任した。

軍が重要施設として買収

明治29年(1896)5月、陸軍第7師団のが札幌に設置された。同時に歩兵・砲兵・工兵の野戦独立隊が月寒に新設された。後の二十五連隊となる場所だった。この土地は吉田善太郎（別記事「吉田用水」の開設者）が寄付をしたものである。兵舎は明治30年に月寒村干城台に完成し、明治32年には札幌連隊司令

月寒駅跡（つきさっぷえきあと）

標示板※の位置：栄通４丁目 アサヒビール敷地内

部の独立歩兵大隊が歩兵第二十五連隊と改称し、施設は順次拡張された。

昭和7年7月、東札幌・苗穂間を電化。10年12月には苗穂・苫小牧間にガソリン動力車を入れて運転時間を短縮したが、第二次世界大戦が始まり、昭和18年８月、国の陸上交通整備強化のために鉄道は政府に買い取られた。

高速化のために新線に切り替え 跡地は市民の憩いの場に

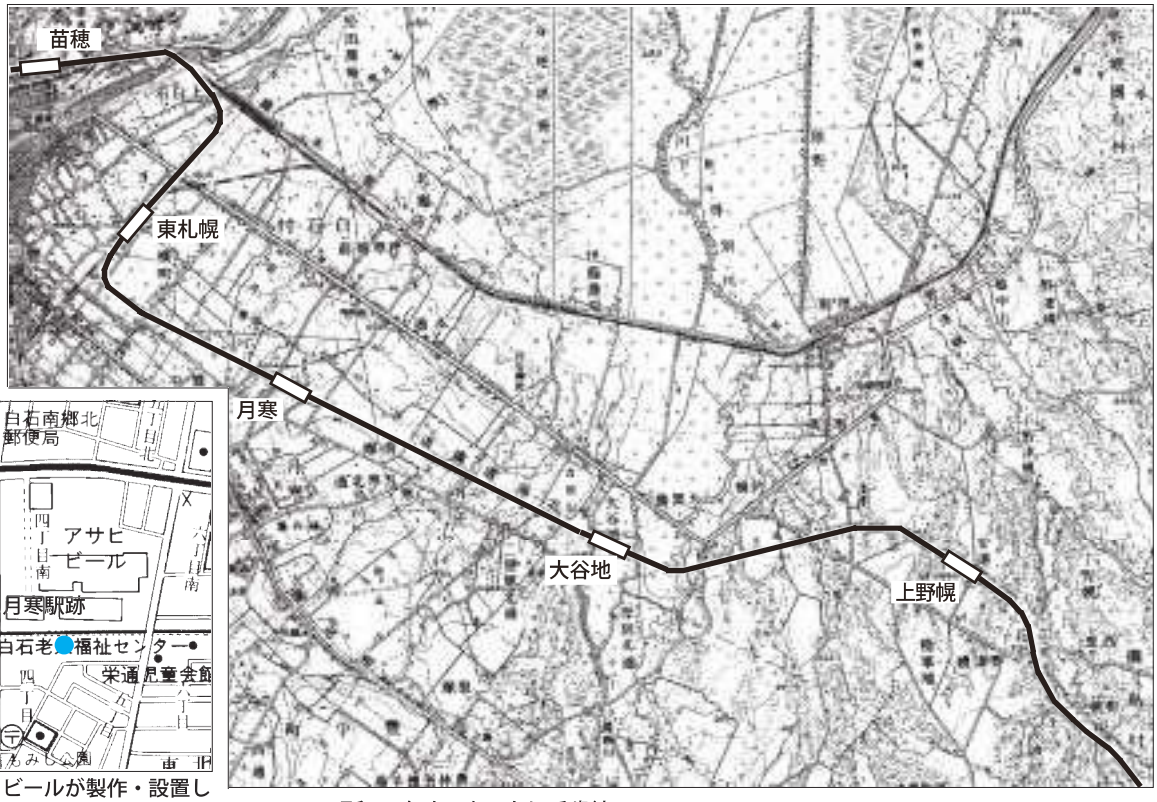
その後、函館本線とともに道央、道南を結ぶ交通の大動脈に発展したが、増加する旅客や貨物に対応するには急カーブが障害となり、鉄道を切り替えることになった。昭和40年12月着工、昭和48年９月に苗穂から白石を経由する複線の現在の路線に切り替わった。

これにより、廃線となった旧線跡地の利用に対してはいろいろな要望があった。札幌市では国鉄と協議して、昭和49年８月、その一部に白石サイクリングロードを建設した。昭和52年７月には大谷地駅跡に白石東冒険公園（当時の名称は「大谷地冒険ひろば」）が誕生し、千歳線跡地は市民の憩いの場になった。

（中西哲男・南部　享）

8100型蒸気機関車

東札幌駅



昭和48年まであった旧千歳線

※この標示板はアサヒビールが製作・設置したものである。

道内炭鉱の安全を一手に担った札幌石炭坑爆発予防試験所

爆発予防試験所から資源技術試験所北海道支所と名称を変えた（昭和30年代の様子）

脚光を浴びた石炭産業

明治から昭和30年代にかけて、石炭は燃料の主役だった。一般住宅では炭小屋と呼ばれる石炭貯蔵小屋をもち、トン単位で買った石炭を貯蔵し、少しずつ取り出してストーブで燃やしたものだ。鉄道、船、工場など、世の中の機械のほとんどが石炭を動力源とし、大きな工場には鉄道の引込線を敷いて石炭のための膨大な敷地を用意した。

巨大な煙突が吐き出す黒煙は近代産業のシンボルであり、日本の石炭埋蔵量の50%を占める北海道は産炭地として大いに注目された。

軍事国家日本にとって、石炭は軍事物資の製造、輸送のための最重要物資だった。国に増産を課せられた石炭業界は増産体制をとり続けた。

しかし、採掘が地下数百㍍の深部に達し坑道が複雑になると、通気が不十分でガス爆発や炭じん爆発が相次いだ。事故の度に数十人から数百人の人が犠牲になった。明治時代は坑内通気は自然通気に任せていたため、ガス濃度が上がり、裸火の照明が引火して爆発することが多かったのだ。

大正4年12月に石炭坑爆発取締規則が制定され、通気量と通気の速度、通気方法、採炭跡の処理、坑内ガス量の制限と検査、安全灯の規制などが定められ、保安対策が始まった。

北海道の炭鉱大型事故
（死者50人以上）

発生	炭鉱名	死者数	爆発原因
明41	新夕張	91人	ガス
大元	夕張	269	ガス・炭じん
大元	夕張	216	ガス
大 9	夕張	209	ガス・炭じん
大13	上歌志内	76	ガス・炭じん
昭 4	上歌志内	70	ガス・炭じん
昭 7	空知	57	ガス・炭じん
昭10	茂尻	95	ガス・炭じん
昭13	夕張	161	ガス・炭じん
昭15	真谷地	51	ガス・炭じん
昭16	三菱美唄	177	ガス・炭じん
昭19	三菱美唄	109	ガス
昭30	茂尻	60	ガス
昭40	夕張	62	ガス

日本第二の試験所が白石に

北海道の炭鉱は他地域に比べてガス湧出量が格段に多く、北海道にもガス炭じん爆発予防に関する研究機関の設立が望まれていた。

福岡県直方町（現在は市）に次ぐ2番目の機関として北海道地区に札幌石炭坑爆発予防試験所が昭和13年（1938）10月に設置された。

用地確保にあたっては、爆発試験による危険と音響が周辺に及ぼす影響を考慮しなければならない一方、試験用品の搬入、関係機関との連絡のとりやすさ、職員の住宅事情などの利便も考慮しなければならなかった。札幌に近く、山林や畑に囲まれ、交通の便もよい場所を探していると、白石村から積

標示板の位置：白石区平和通３丁目北１

昭和 22 年頃の札幌石炭坑爆発予防試験所（米軍航空写真）

極的な誘致があり、函館本線の白石駅に近い現在地に15,800平方㍍の土地を確保できた。

人材の確保も大きな問題だったが、北海道帝国大学(現在の北海道大学)の協力により優秀な研究者が確保でき、試験研究は昭和15年から始まり、爆発災害の原因となる安全灯など坑内用品の検定も始まった。

しかし、昭和16年に始まった第二次世界大戦で職員が召集されたり、軍需産業に配置転換されるなどして研究要員が安定せず、研究用資材も入手しにくくなり、研究は困難となった。

エネルギーは石油の時代へ

戦後、日本は民主主義国家へ脱皮し、人命尊重、人権擁護が強調されたが、炭鉱は戦争中の乱掘で荒廃しており、抜本的な保安対策が早急に必要になった。

そのため、昭和23年には名称を北海道炭鉱保安技術研究所と改め、従来の爆発試験だけでなく坑内保安全般にわたる総合的な試験研究を行うことになったが、人も予算も削られ、研究資

爆発試験坑道

材が不足し、困難な時期が続いた。それでも精力的にガス爆発や粉じん爆発の原因を究明し、対策を講じて数多くの成果を挙げたのである。

戦後はエネルギーの転換期にもなった。世界の石油資本が日本のエネルギー市場に進出し、一気に石油化が進んだからだ。政府は石炭を保護したが、暖房も動力も燃料は急速に石油へ傾き、エネルギー改革は避けられないものとなり、国の政策も昭和33年頃から石油中心に転換していった。

冬になると空全体が石炭の燃焼による煤煙に覆われ、ばいじんと硫黄酸化物による健康被害が深刻になった。札幌市では昭和37年に煤煙防止条例を制定し、暖房は石油ストーブへと急速に切り替わっていった。

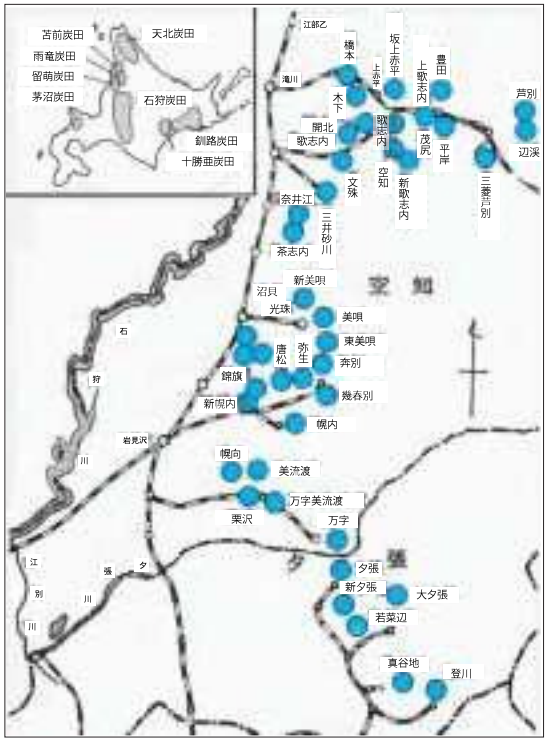
新メタン資源開発などにも挑戦

石炭市場が狭まったことで北海道の炭鉱は次々と閉山した。現在残っているのは坑内掘り炭鉱では釧路の太平洋炭鉱ただ一つで、露天掘り炭鉱は芦別の三井芦別炭鉱など小規模な 14 の鉱山がある。

こうした変化に伴い、試験所も時代に合わせた変遷を経て、北海道石炭鉱山技術試験センターとなり、業務内容も鉱山保安のほかに、石炭層内に包蔵され、昔は厄介者扱いされたメタン(コールベッドメタン)や、海底大陸棚下の氷の中に閉じこめられているメタン（メタンハイドレート）の開発や利用の研究、さらに坑内粉じんを除去する技術を応用して、ビル解体工事で発生するコンクリート廃材のリサイクル時に発生する粉塵を除去する研究など、既存技術の他方面への応用にも取り組むようになった。

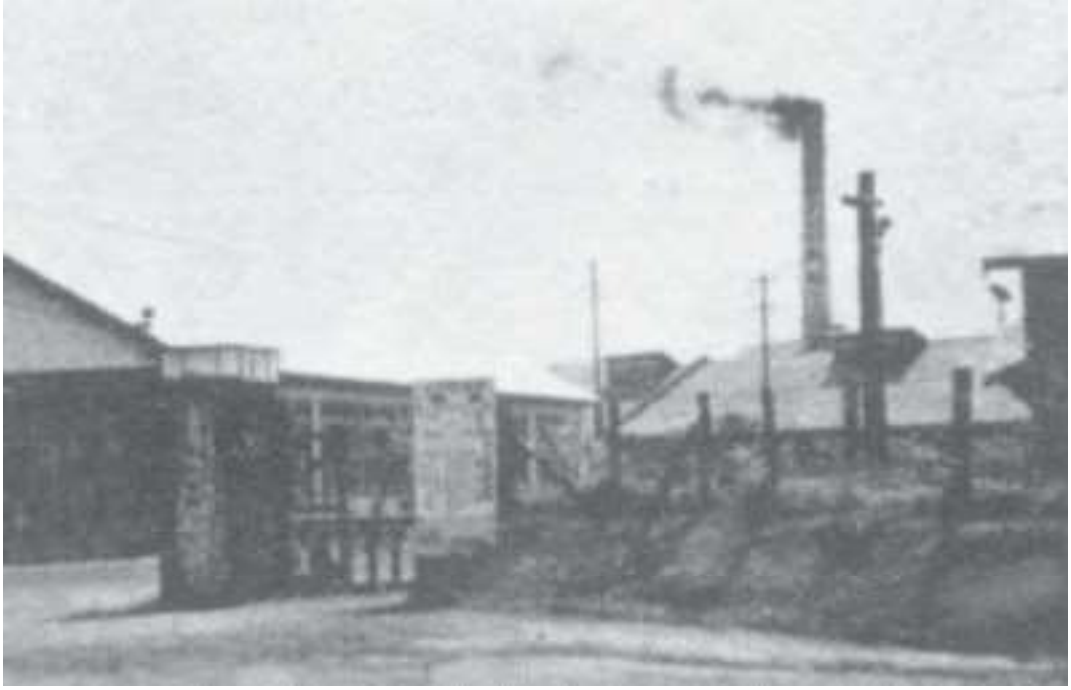
（鈴木祥覚）

※平成13年度末で、北海道石炭鉱山技術試験センターは閉鎖されている。



昭和 10 年代にあった石狩炭田の炭鉱

豊平と東札幌駅を中心に栄えた白石の工場地帯



北日本ゴム株式会社

周辺地域の人たちの物資購入は白石・豊平が中心だった

開拓使以来、ビール・製糖・製麻などの官営工業は創成川以東に配置し、私企業工場は都心部に本社を置きながらも周辺の主要な箇所に工場を配置していた。

とくに国道36号両側の豊平地区(豊平橋～豊平神社)には、豊平川以東の札幌付近の村落、さらに遠く恵庭、千歳、長沼村民の需要に応える醸造業、精米所、馬車・橇製造、蹄鉄業、牛馬具製造、鉄工場、俵・縄・むしろ製造、木工場、みの・竹篭製造、建築関係などが建ち並び、宿泊のための馬宿も並んでいた。

札幌合併と鉄道敷設で急発展

明治43年(1910)に上白石の一部(旧菊水北町・菊水西町)と現豊平区豊平地区が札幌区と合併して発展が勢いづき、さらに大正7年(1918)に定山渓鉄道(白石駅～定山渓間）が開通、大正14年(1926)に北海道鉄道(旧国鉄千歳線)が開通して原材料や製品の輸送に好都合な条件が整ったため、両鉄道沿線の豊平地区から菊水・東札幌にかけて産業が発展した。特にゴム工業、紡績工業、定山渓沿線の山から運んだ木材工業などが発達した。

ゴム工場が多かった

ゴム工業は、地下足袋、胴付、水中、水田、一般の長靴、ボッコ靴からスキー靴、合羽など、一般市民生活から産業分野に至るまで需用が多く、活況を呈した。

これらの製造工場は豊平から菊水地区に集中しており、白石には北都ゴム(菊水1-3)、三共ゴム（菊水7-2)、白熊ゴム（東札幌1-3)、北藤ゴム（東札幌3-2)、北日本ゴム(菊水3-5)があった。

北日本ゴム工場勤務の女工の話によると「工場には300人の工員がおり、鉄の作業板の前に、朝座ると帰るまで同じ場所で針・はさみと包丁に手ミシン等の作業道具をならべ、長靴を作るのに型ができるまですべての作業を一人でやった」そうだ。当時はすべてが分業化の行われていない手作業だけで行われた。

大手鉄鋼会社と多数の鋳物工場

大手の豊平製鋼所が豊平1条10丁目から東札幌1条1丁目にかけて設置されていて、昭和39年(1964)西区発寒工業団地に移転した。

他にも鶴巻工業㈱、(菊水6-2)、大島鋳物工業（菊水6-4)、北海鋳鋼㈱（菊水5-4)、工作機械製作所（菊水6-4)、後藤鋳物（菊水9-4)、阿部鋳物（上白

石）、白石鋳物（上白石）、などがあり、周辺には鋳型製造業など下請け会社が数多く軒を並べていた。

道の政策で始めた繊維工場

戦後、経済の再建のために、道庁は緊急農業増産計画を立てた。そのなかで綿羊40万頭の飼育計画が実施された。猿払村でホタテ業を営んでいた山川栄は昭和24年に北日本編織㈱を白石に建て、毛織物の生産を始めた。幸いに通産局、道、市の指導で年々事業を拡張して、旭川のホクレン北紡工場とともに道内羊毛集荷を二分するようになった。

昭和27年、北日本毛織会社と改称し資本金も増資した。昭和30年代には東北から九州に支店を置き、37年には販売会社を設立し全国販売するに至った。全盛期には、道南・東北各県から中卒の女子工員を募集し、4階建ての工員寮を設け、従業員650余名の企業となった。

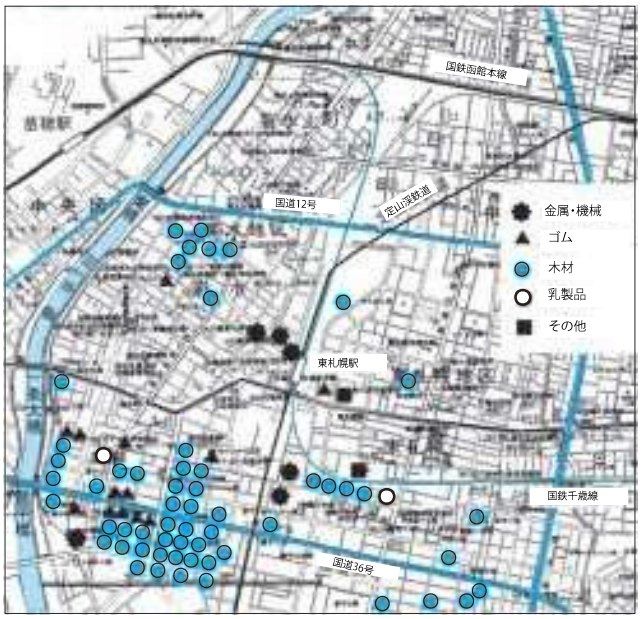
しかし、化繊の普及と海外からの安い製品が輸入されるようになり、昭和41年、会社更生法の適用を受け、51年の地下鉄東西線開業を前に完全撤収した。

豊平を中心に盛んだった木材工業

明治25年(1892)887戸の札幌大火復興を機に豊平村阿部幣治ら29人の札樽木材業者は29年6月26日、道庁長官認可の札樽木材商組合（嘉納久三郎組合長・2代目阿部幣治組合長）を設立、その後幾変遷を経て昭和24年(1949)6月1日、札幌市周辺木材業者87人による札幌地区林材協会を設立し現在に至っている。

札幌の発展とともに木材業界も発展し、戦争による昭和15年の統制経済、戦後昭和29年の15号台風による風倒木、40年代までの高度成長の波の中で順調に伸びた。

明治12年(1879)平岸村滝野に官営水力製材所が設立されたことに見るように、豊平橋経由の木材運搬の至便さから旧豊平村が木工場の適地であったと思われる。とくに大正7年の定山渓鉄道、大正15年の北海道鉄道（旧国鉄千歳線）開通により豊平から現菊水・東札幌の沿線に木材工場・販売店がたくさんできた。

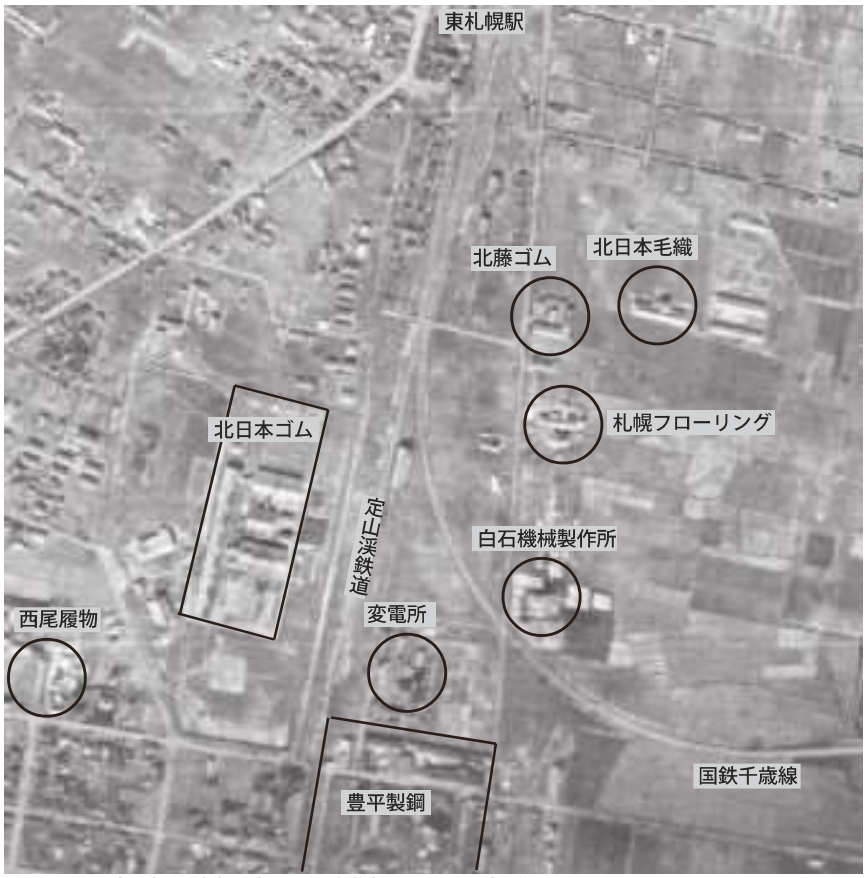


大正期から昭和30年代まであった工場群

都市化とバブル
景気破綻で減少続く工場

このように製造業で活気を呈した白石・豊平であったが、都市化が進んで工場と住宅が密集・混在した状況が進み、市が造成した発寒工業団地などへの移転が進んだことと、バブル経済の破綻、外材輸入の荒波などで廃業した工場も多く、現在はかつての工場街の面影はなくなっている。

（富岡秀義）



昭和23年頃米軍撮影航空写真に見る東札幌駅周辺の工場群